

名古屋の幻の富士山

浪越山盛衰記

場所

鶴舞中央図書館 2 階

期間

2011 年 12 月 17 日 (土)
～2012 年 3 月 15 日 (木)

中区大須二丁目、大須観音の近くに高さ3メートル余り、直径22メートルの小さな山があります。頂上に登っても周囲のビルの壁しか見ることのできないちっぽけな山なのですが、とても大きな3本の木と3つの山道があり、ふもとには2つの案内表示もあります。1つは名古屋市教育委員会による「浪越公園跡」についての案内で、もう1つの設置者はわかりませんが「那古野山古墳物語」という案内です。これらを読

んでみると、この小山は約1500年前につくられた前方後円墳の一部で江戸時代には清寿院という修験道の寺の後園であったこと、明治時代になると愛知県初の公園である「浪越公園」となり、大正時代には名古屋市の公園となって「那古野山公園」と呼ばれるようになったことなどがわかります。

今回の展示の名称に「名古屋の幻の富士山」と付けていますが、江戸時代には「那古野山」・「庚申山」、明治頃には「浪越山」、現在では「那古野山古墳」と呼ばれることになるこの小さな山は実はかつて名古屋の富士山だったと思われまふ。その証拠もいくつかあります。例えば比叡山といえは延暦寺というように寺院には山号という称号がつけられていることがありますが、江戸時代にあったという清寿院の別名はなんと富士山観音寺なのです。この小山が富士山であった証拠はこの他にもありますが、まずは日本一の富士山の話からはじめまふ。

富士山といえはもちろん日本一高い山ですが、富士山はその高さだけでなく美しい円錐形の山容からも日本国内だけでなく世界でも人気のある山なのではないでしょうか。古くは万葉集にも登場する歌の名所として知られていた富士山は、山そのものが神体として信仰の対象となり、富士信仰・浅間信仰などと呼ばれています。「富士」あるいは「浅間」の社名がつけられた神社が富士山を見える地域を中心として全国に約1300社あるといわれていますが、これらの神社の現在の祭神はコノハナサクヤヒメ（木花咲耶姫）という女神であることが多いそうです。かつては富士山の神は浅間神・浅間明神・富士権現・浅間大菩薩と呼ばれる男神か「竹取物語」のかぐや姫などでした。平安時代の富士山は延暦・貞観と大噴火を起こす火の山でしたので、富士山は火の神・噴火の神とみなされ、それを鎮める神として浅間信仰が定着していったと考えられます。そして中世には軍神としても信仰されました。また、「富士の火」を「思ひ」と重ね合わせ恋愛の神とされることもあったそうです。

日本一の富士山の話 (その1)

名古屋から富士山は見えるのか？

宝永4年(1707)には富士山が噴火し、その噴煙などが名古屋から見えたと記録もありますが、江戸時代には富士山が見えるという意見の方が多いようです。名古屋城天守最上階からは快晴の時の日の出以前に富士山が見え、志賀・田幡・御器所・前津からも同じ形にみえると記したものもあります。

那古野山公園のすぐ近くにも「富士」と「浅間」の両方を社名につけた「**富士浅間神社**」(中区大須二丁目)があります。『名古屋の史跡と文化財』によると富士浅間神社は“明心4年(1495)駿河国(静岡県)の富士権現を勧請して祀ったといわれ、一説には牧与三右衛門長清が勧請したとも伝える。牧長清は旧前津小林村の土豪で大永6年(1526)再興したともいう。一時、愛宕社、宝寿院(のち清寿院)の別当になったが、明治に至り排仏毀釈で再興し現在に至っている。(後略)”とのことで、祭神の中央にはやはり「木花開耶姫命」が祀られているそうです。

現在の富士浅間神社と那古野山公園、それから近くにある名古屋三名水の一つである柳下水の井戸は江戸時代にはすべて清寿院の境内にありました。『富士浅間神社誌』には“藩祖義直公より賜りたる浪越山一帯の地は、五千五百五十九坪なりし”とあります。現在の那古野山公園の面積は892㎡とありますので、1坪≒3.306㎡として計算すると5,559坪は約18,378㎡ですので現在の20倍以上の大きさがあったこととなります。江戸時代後期の『尾張名陽図会 巻之四』(天保2年までに成立)の「清寿院富士山観音寺」・「清寿院後園の図景」や『尾張名所図会 巻之一』(天保15年刊)の「清寿院 善篤寺 大須大門前」の俯瞰図などを見ても現在の円墳状に残されている那古野山古墳の姿とはかなり異なるようです。



名古屋市教育委員会による平成7年の那古野山古墳の墳丘確認調査の報告には『尾張名所図会 巻之一』の俯瞰図に現在の那古野山古墳と(富士)浅間神社古墳の推定位置が示されています。また、この調査によると“現在古墳の墳丘と考えられた土の多くは、中世以降の盛土で(中略)埴輪や古墳に関連する遺物も多く出土することから、中世盛土の下、もしくは近くに古墳があることも確実である”そうです。この調査の結論として次のように述べられています。

すなわち、5世紀中～後半の古墳を大幅に改変盛土したものが、近世の「浪越山」であり現状の「那古野山古墳」と推定され、古墳本来の墳形・規模を確認しようとするならば、マウンドの部分以外を広く含めた全面的な調査が必要であろう。

どうやら名古屋の幻の富士山である浪越山は古墳を基礎として大幅に改変盛土してつくられたもので、浪越山=富士山と考えると浪越山は人工の築山でいわゆる「**富士塚**」と呼ばれるものであるようです。(富士講による高田富士以降のもののみを富士塚と呼び、これよりも前につくられたものを区別する説もあります。)日本一の富士山にあやかって各地にその地域の地名などを冠した「〇〇富士」と呼ばれる山がありますが、これらは地方富士・郷土富士・ふるさと富士・ご当地富士などと呼ばれ、自然の山だけでなく人工の築山である富士塚もあります。この辺りでは小牧市の「尾張富士」がよく知られていますが、富士塚である浪越山が江戸時代の姿のまま現在も残っていたら「名古屋富士」と呼ばれていたかもしれません。

それではかつて名古屋にあった幻の富士山、中世に富士塚として築造され、江戸時代には那古野山・庚申山として栄えた浪越山の歴史についてご紹介しましょう。(以下の記述は主に『富士浅間神社誌』と『名古屋の公園 100年のあゆみ』によります。)

(1) 古墳時代(浪越山前史)

前述のとおり、那古野山古墳は5世紀中～後半頃に作られた前方後円墳でした。江戸時代末の元治2年(1865)3月15日には古墳であることの有力な証拠のひとつである有蓋脚付短頸壺(須恵器)が村瀬忠喬により掘り出されています。昭和4年2月8日の小栗鐵次郎の鑑定によると“本器は奈良朝以前の作にして今を距る一千六七百年以前の作なり此器は最も大なるものに属し他所より發掘したる凡てより大なる点に於て此塚の主が偉大なりしを證明し得らる”とのことです。

(2) 浅間宮の勧請、富士塚の築造(浪越山の誕生)

関東の例ですが、『新編常陸国誌』には文明13年(1481)に“諸郷に富士塚を置と見えたれば、この比より多くなりしとみゆ”と、『松屋筆記』には文明18年(1486)の段に“関東処々富士塚を築く”とあり、富士塚は15世紀後半に始まったと考えられるそうです。富士浅間神社の安永3年(1774)9月の日付のある棟札にも“当社浅間宮往時明應四年巳卯六月朔日駿州富士神職小林何某 後土御門院勅を奉し 当社に移し奉る”とあるように現在の富士浅間神社の地に浅間宮が勧請されたのは明應4年(1495)6月朔日とされていますが、やはり15世紀後半ということになります。

また、一説には大永6年(1526)に社殿を再建奉納した**牧長清**が勧請したともいわれていますが、牧長清は前津小川の城主で織田信長の妹婿でもあった人物で、父である牧長義の妻は織田信秀(信長の父)の妹といわれています。この牧長清について『尾張名陽図会』の「清寿院富士山観音寺」の項には次のようにあります。

当国小川の城主牧与三左衛門尉長清、駿河国富士山を信じ、七度禪定の志願有しが老年に及んで四度残りしかども、遠路の旅行なりがたきゆへ、在城の近辺に此社有を幸として、当山に参詣して七度禪定の結願を撮せらる。其砌、当社を再営有りしとなり。

牧長清の生年は不詳ですが、没年については「士林浜洄」に元龜元年(1570)2月15日とあります。したがって、浅間宮が明應4年(1495)に勧請されたというのであれば、牧長清がよほどの長命でないかぎりこのときの勧請に関与したとするのは無理があるように思います。

いずれにしろ現在の富士浅間神社の地に浅間宮を勧請(あるいは再建)するのに合せて、当時関東の各地で築かれていた富士塚に習い古墳を大幅に改変盛土して富士塚(浪越山)が築造されたと思われま。そして、牧長清はこの富士塚を富士山そのものの勧請と考え、七度禪定の結願を果たすために登ったことでしょう。

日本一の富士山の話(その2)

桶屋富士の正体は?

かつて名古屋地方気象台のレーダーを使って名古屋から富士山が見えるか調べたことがあるそうですが、結論としては残念ながら名古屋から富士山は見えないそうです。名古屋から見える富士山を描いたものでは葛飾北斎の「尾州不二見原」(『富嶽三十六景』)が有名で、丸い桶ごしに富士山が見えるその構図から「桶屋富士」とも呼ばれていますが、北斎が描いた幻の富士山の正体は南アルプスの聖岳だそうです。

展示資料

1	<p>「有蓋脚付短頸壺」(『古墳はなぜつくられたのか』 名古屋市博物館 2005年 p.42)</p> <p>江戸時代末の元治2年(1865)3月15日に浪越山から総高48cmの有蓋脚付短頸壺(須恵器)が掘り出されました。</p>
2	<p>「那古野山古墳」(『埋蔵文化財調査報告書25』 名古屋市教育委員会 1996年 p.6-7)</p> <p>名古屋市教育委員会による墳丘確認調査の報告書です。『尾張名所図会』の清寿院の俯瞰図を使って現在の那古野山古墳と(富士)浅間神社古墳の位置を推定していますが、現在残っている那古野山古墳は浪越山のごく一部だとわかります。また、調査の結果、“現在古墳の墳丘と考えられた土の多くは、中世以降の盛土で”、“中世盛土の下、もしくは近くに古墳があることも確実”だそうです。</p>
3	<p>「清寿院 善篤寺 大須大門前」(『尾張名所図会 巻之一』 天保15年刊)</p>
4	<p>「清寿院富士山観音寺」(『新卑姑射文庫2編 猿猴庵の本』 名古屋市博物館 2002年 p.2-3)</p> <p>猿猴庵による『新卑姑射文庫2編』には清寿院で行われた竹細工の見世物の様子が描かれていますが、清寿院は見世物興行がよく行われた場所の一つでした。同じく猿猴庵による『尾張名陽図会 巻之四』にも清寿院について詳しく書かれています。</p>
5	<p>「清寿院後園の図景」(『尾張名陽図会 上』 ブックショックマイタウン 2006年)</p>
6	<p>「門前町古覽」(『門前町誌』 牧野市太郎/編 牧野市太郎 1901年 口絵)</p> <p>「浪越山」・「二子山」・「千本松原」・「前津」の文字がありますが、「前津」に波が打ち寄せているように描かれていますので、現在よりもかなり水面が高い太古の大昔の様子を描いた想像図のようです。二子山も大須二子山古墳と呼ばれる古墳(前方後円墳)だとされています。</p>
7	<p>「大須公園 瀧」(『名古屋大須ものがたり』 沢井鈴一/著 堀川文化探索隊 2010年 口絵)</p> <p>浪越公園は大須公園とも呼ばれていたようです。『大須繁昌記』(早川徳三郎/著 名古屋市1960年)には浪越公園の様子として“東側の方が傾斜が急で、中腹の処に滝でも落ちそうな岩組があり、流れの末が下の池に続いていた。”とあります。昭和14年の「大須かいわい絵図」(『愛知県史 資料編33』 愛知県 2007年)にも浪越山の文字がありますが、浪越公園が廃止されてからも昭和初期までは浪越山と呼ばれていたのかもしれませんが。</p>
8	<p>「鶴舞公園歴史散歩コース」 名古屋市公園緑地協会 平成9年3月</p> <p>「鶴舞公園ガイドマップ」 名古屋市みどりの協会 平成23年2月</p> <p>「名古屋公園計画平面図」(明治40年頃)の浪越山の場所を現在の案内図で探してみると、平成9年3月の案内図では「熊沢山」の文字がある場所のようです。平成23年2月の案内図には「熊沢山」の文字はありませんが、子ども広場(昭和54年開場)に「山の砦」がありません。その形状は富士山をイメージさせる円錐形ですが、鶴舞公園の新富士でしょうか!?</p>

9	『つるまこうえん・百歳・祭！事業報告書』 名古屋市 2010年 p.44
	「名古屋公園計画平面図」(明治40年頃)、「鶴舞公園平面図」(明治44年頃)があります。

10	『富嶽廿六景之内尾州不二見ヶ原図』 葛飾北斎板画 宝古加美会
	名古屋宝古加美会蔵板から作成した版画で、丸い桶ごしに富士山が見える構図から「桶屋富士」として有名です。江戸時代には名古屋から富士山が見えるという意見の方が多いようですが、実際には名古屋から富士山は見え、北斎が描いた幻の富士山の正体は南アルプスの聖岳だそうです。

11	A「蓬左遷府記稿挿圖 五重目見通地名繪圖」市20-202-8 B「名古屋城御天守五重目ヨリ見通地名方角圖」市20-144
	A・Bともに名古屋城の最上階からの360度の遠望が描かれており、遠くの山の名前も詳しく書かれています。富士山を探してみると「尾州烏ヶ根」と「猿投山」の間に「駿州富士(山)」の文字と山影が描かれています。これらの元になったと思われる図(『特別展大にぎわい城下町名古屋』2007年)の附録の帳面には“富士山は快晴の時の日の出以前に見え、志賀・田幡・御器所・前津からも同じ形に見える”とあります。

12	「富士見原真景之図」(上)、「御鋤祭真景図略三」(下) (『富士見の里昔の前津』 名古屋市博物館 2006年 p.8-9)
	上の図は富士見原(現在の中区富士見町)にあった尾張藩重臣の山村家の下屋敷からの眺望を猿猴庵(高力種信)が描いたもので、右端の辺りに「尾州富士山」があります。猿猴庵は富士見原の卯の花大木から南2、3丁の間が最も富士山がよく見るとも述べています。下の図は江戸時代の文政10年(1827)秋の御鋤祭りで富士見連(前津小林村の富士見原?)による仮装行列の一つとして富士山の作り物と白装束の富士行者(富士講)の装束をした人物が練り歩いた様子が描かれています。

13	「牛込市谷大久保絵図」(『嘉永・慶応江戸切絵図』 人文社 1995年)
	尾張藩の江戸下屋敷であった戸山御屋敷(戸山尾碓殿)付近の江戸切絵図をみると近くには「高田富士」があります。高田富士は山肌を黒ボク(溶岩石)でおおい各所に富士山の名所を模したものを配備した本格的なミニチュア富士で、富士講の講徒により築造された最初の富士塚として有名でした。切絵図の左側にも大久保西向天神の「不二」が描かれていますが、江戸にはこの他にもたくさんの富士塚がありました。

14	「和田戸山御屋敷圖」 市13-210付図
	戸山御屋敷には「木の間之富士」と称され江戸百富士の一つに数えられた富士見の名所もあり、遠景として屋敷の外に富士山が描かれています。ちなみに敷地内には小田原宿を模したといわれる宿場町があり、明治時代に箱根山と呼ばれることになる築山もありました。(→『尾張藩江戸下屋敷の謎 虚構の町をもつ大名庭園』(小寺武久/著 中央公論社 1989年)が参考になります。)

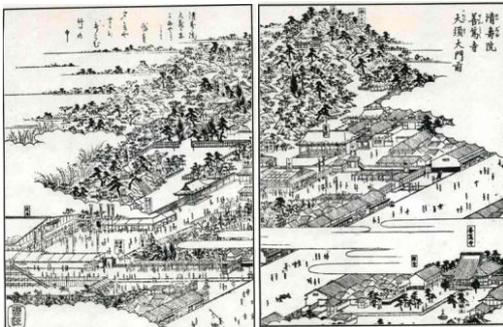
(3) 清寿院富士山観音寺（那古野山・庚申山の時代）

中世に築造された富士塚は江戸時代に清寿院に取り込まれて、その後園となります。『尾張名所図会』によれば富士塚は「那古野山」と呼ばれていたようで、その様子について次のようになります。

清寿院の後園にありて、古木老幹生ひ茂り、苔逕怪石攀ぢ廻る、古色隠々たる雅地なれば、当年の面影その儘見るに足る小山なり。

『尾張名陽図会』ではこの後園を“むかし名古屋山の名残”としていますので、碁盤割の札の辻を峠とする名古屋山（那古野山）の一部であったと考えられていたようです。名古屋城普請のときにはこの地は福島正則の宿营地になり、清須城内の建物や砦、不用の岩石がこの地に移されました。そして、尾張藩の藩祖徳川義直の入国のときには修験の林蔵坊という人物が社守となっていました。その頃に庭園とされたようです。

しかし、粗暴な行為が重なったため林蔵坊は寛永2年（1625）に寺社奉行により放逐され、無主となった社は村瀬大円坊良清の預かりとなります。大円坊（祖は織田信長の家臣村瀬左馬介）は清須時代の松平忠吉のときに修験頭と軍員役兼務を仰せつけられていた人物で、清須越の際には南寺町愛宕社の地を得ていました。寛永16年（1639）、次代の宝寿院良済のときに藩主徳川義直より社地と住地を賜り、寛文7年（1667）には藩命により清寿院に改称するとともに御切米20石を社領として下賜されています。また、宝寿院良済のときに当山修験道醍醐三宝院袈裟下として尾張・美濃二ヶ国の修験頭になり、明治維新まで清寿院主は村瀬氏の世襲となりました。



改めて『尾張名所図会』の清寿院の俯瞰図をよく見てみると、那古野山の山頂らしき部分に「庚申山」の文字があります。庚申というのは干支（十干と十二支の組合せ）のひとつで60年に1度めぐってくるのですが、実は孝安天皇九十二年（紀元前301年）の庚申年に富士山が出現したとする伝説があります。この伝説を根拠に庚申と富士山を結びつけて庚申年を**富士山御縁年**とする思想が寛政12年

（1800）の庚申年頃から宣伝されるようになったと考えられています。おそらくこの頃から清寿院の那古野山も庚申山として宣伝されるようになったのではないのでしょうか。

清寿院の祭礼は創建以来5月晦日夜祭、6月朔日大祭でしたが、旧暦で6月1日といえば富士山の山開きの日ですので、やはり富士山に由来するものであると思われます。（後に駿河国大宮である本宮にならって、6月10日夜祭、11日大祭に改められました。）また、清寿院は『新卑姑射文庫2編』に描かれているような見世物興行の場でもあり、那古野山＝庚申山というミニチュア富士を中心としたテーマパークのような存在だったようです。再び『尾張名陽図会』の「清寿院富士山観音寺」の項目を見てみると、祈祷所、行者堂、末社（稻荷・金毘羅・天満宮・秋葉・福天）、飯綱権現社、富士権現の狛犬、福島家の書院、琴菊桜があり、“此境内は、つねに芝居・見せものゝ類ひ、絶るなし。見物の人集りて殊賑はし。”と見所が満載です。このうち行者堂中尊正観音は聖徳太子の作とされ、役行者と弘法大師が脇檀に安置されていました。聖徳太子も役行者も富士山に登った（飛んでいった？）という伝説の人物です。

(4) 浪越公園（浪越山の時代）

那古野山・庚申山と呼ばれて栄えた小山も江戸時代の終わりとともに大変貌することとなります。従来の神仏混淆が改められたことにより清寿院 7 代村瀬忠喬（後に喬臣）は一旦神職となりましたが、明治 4 年 7 月には世襲の神職を解かれてしまいます。さらに明治 5 年 9 月には清寿院が廃止されるとともに境内の芝居小屋や興行物も禁止されることになり、これと前後して境内も大幅に整理縮小されました。

明治 9 年 7 月になると、名古屋に一つも公園がないことを憂えた付近の町民が連署して清寿院跡地を名古屋区民遊歩の場所とするよう建議が出されました。翌明治 10 年に許可され、明治 12 年 3 月に**浪越公園**が愛知県により開設されました。『名古屋市史 地理編』には当時の様子について次のように書かれています。

當園は西北に小山あり、麓に柳下水あり、又池塘ありて、春は櫻花、夏は蓮花、秋は紅葉の風景あり、又小山に登りて眺望すれば西南北には多度山、伊吹山は云ふも更なり、伊勢の山々を遠望し、北方に加州の白山、東方に富士、其他の高峯を見るを得可く、甚だ絶景の地たり、然れども地域僅に六百餘坪なれば、狹隘にして雑沓甚しき

『門前町誌』（明治 34 年発行）の「門前町古覽」の図には「**浪越山**」が描かれていますが、“那古野山は冊首に浪越山と書きしもの是なり”とありますので、那古野山はこの頃には浪越山と呼ばれていたことがわかります。その後、明治 29 年には公園地内に含まれていた富士浅間神社の社地が分離独立し、明治 40 年の愛知県商品陳列館改築の際には浪越山を飾っていた清須越の残石は陳列館庭園用として移され、日本三名茶席のひとつであった猿面茶屋の周囲の補修に使われることとなりました。

(5) 鶴舞公園（幻の浪越山の時代）

ここで最後の清寿院主である 7 代村瀬忠喬（のち喬臣）についてご紹介しましょう。那古野山古墳の有蓋脚付短頸壺（須恵器）を掘り出した人物であることは前述のとおりですが、明治 7 年に東本願寺名古屋別院で行われた名古屋博覧会の出品目録にも「村瀬喬臣」の名前があります。（出品物に大小 17 の軍螺とあるのは元修験頭ならのでしょうか。その他に刀、木の孔子像、嵯峨彫の鬼も出品しています。）村瀬忠喬は幼名喬之助、のち喬臣、また喬長と称しました。清寿院主でなくなったのちには修験道から茶道に転進し、裏千家十一世玄々斎のもとで茶を習得して明治期の中京を代表する茶人となりました。茶道界では“玄中さま”と呼ばれていたそうですので、以下では村瀬玄中として話を進めます。

村瀬玄中は茶人であるだけでなく造園の技にも秀でた人で、上前津の龍門、鶴舞公園、中村公園の作庭にも関与したとのこと。このうち、鶴舞公園は名古屋市が設置した初の公園でその設置計画は明治 26 年に公園設置臨時委員会が設けられたことに始まります。10 余年を経過したのち、精進川改修工事および第 10 回関西府県連合共進会開催を機によろやく計画が具体化することになり、公園設置の申請手続は明治 40 年 1 月 26 日付けで行われましたが、当時の計画説明書の摘記や明治 40 年頃の「名古屋公園計画平面図」によると和洋折衷式の五区（天寿園、地寿園、風寿園、山寿園、水寿園）からなる庭園が計画されていました。この計画図の第四区山寿園部分にはなんと「**浪越山**」の文字があるのです。計画説明書の摘記にも次のようにあります。

山寿園 は面積二万四千百坪を有す、数個の丘山を築くその崎嶇羊腸として潺湲々流を繞らすは浪越山にして一泉を隔てて龍ヶ池に面するを虎嘯山と云う、西に府字池あり、北に運動場あり、而して東に高台を築く、台高く一眸園の勝地を集む、泉を起雲泉と云い台を望府台と云う。

村瀬玄中がこの計画に直接関与していたことを示す資料を見つけることはできませんでしたが、「浪越山」の命名には元清寿院主である村瀬玄中と何らかの関係があったと想像されます。

明治42年11月19日の告示により「鶴舞公園」と名称が定められて、明治43年の共進会終了後に本格的な造園工事が始まります。大正9年頃には和洋折衷の大公園がほぼ完成していますが、当初の計画にあった浪越山という名称の山が鶴舞公園に実際にあったかどうかは定かではありません。明治40年頃の「名古屋公園計画平面図」の浪越山に相当する場所を「鶴舞公園歴史散歩コース案内図」(平成9年3月)で探してみると、そこには「熊沢山」の文字がありました。おそらくこの熊沢山が幻の浪越山の名残なのでしょう。

(6) 那古野山公園(那古野山古墳の時代)

鶴舞公園が開園する一方で浪越公園は明治42年1月29日告示により廃止され、翌43年12月26日に愛知県から名所史跡保存を理由に山の一部のみが名古屋市に無償譲渡されました。公園設置を疑問とする意見があったものの、当時の阪本鈺之助市長は“如何ナル歴史ヲモツモノカ實ハ發見シナイガ、古クカラ浪越山トシテ清壽院トイフ山伏ノ家ガアッタヨウニ聞イテルカラ何カ由緒ノアルモノニ相違ナイト想像サレル”と説明し、大正3年2月14日に「那古野山公園」となりました。そして、この山の一部が現在の那古野山古墳なのです。

さて、明治40年に猿面茶席の補修に使われることとなった浪越山の残石は、昭和初期に猿面茶席といっしょに鶴舞公園にやってきます。しかし、その猿面茶席も戦争で失われ、猿面茶席のあった吉田山も昭和39年には野球場に姿を変えています。おそらく浪越山にあった残石は今でも鶴舞公園のどこかで人知れず眠っているのでしょう。

展示資料以外の主な引用・参考文献

- ・『名古屋の史跡と文化財 新訂版 第3版』 名古屋市教育委員会／編 名古屋市教育委員会 1998年
- ・『富士山コスモロジー』 藤原成一／著 青弓社 2009年
- ・『角行系富士信仰』 大谷正幸／著 岩田書院 2011年
- ・『富士塚考 江戸高田富士築造の謎を解く』 竹谷靱負／著 岩田書院 2009年
- ・『庚申信仰 (民衆宗教史叢書 第17巻)』 小花波平六／編 雄山閣出版 1988年
- ・『富士山噴火とハザードマップ 宝永噴火の16日間』 小山真人／著 古今書院 2009年
- ・『「富士見」の謎』 田代博／著 祥伝社 2011年
- ・『建築史論叢 稲垣榮三先生還暦記念論集』 中央公論美術出版 1988年
- ・『富士浅間神社誌』 河野重祐／著 富士浅間神社社務所 1932年
- ・『名古屋市史 地理編』 名古屋市／編 愛知県郷土資料刊行会 1980年(大正5年刊の復刻版)
- ・『名古屋の公園100年のあゆみ』 名古屋の公園100年のあゆみ編集委員会／編集 名古屋市 2010年
- ・『名古屋都市計画史 上巻』 名古屋市建設局／編 名古屋市建設局 1957年
- ・『茶どころ名古屋』 大野一英／編著 茶道裏千家淡交会名古屋支部 1986年
- ・『愛知県史 別編[7] 文化財1』 愛知県史編さん委員会／編集 愛知県 2006年